

## 平成 28 年度 学生生活支援室活動報告

山中大貴<sup>\*1</sup>, 荒木史代<sup>\*2</sup>, 笠井利浩<sup>\*3</sup>, 誉田優子<sup>\*1</sup>

### The Student Guidance Office 2016 Annual Report

Daiki YAMANAKA<sup>\*1</sup>, Fumiyo ARAKI, Toshihiro KASAI and Yuko KONDA

<sup>\*1</sup> Student and Education Affairs Department

This article reports statistics and some activities in the student guidance office as 2016 annual report. From the reports of activities and statistical results, the number of students to utilize free space in student guidance office has been increasing for this 12 years and free space functioned as “ibasyo” for many students. In addition to this, through UPI test and post-interview, six students sought support from student guidance office and four students continuously had counseling. Finally, statistical results addressed a variety of student’s problems for learning and career to developmental disorder and mental disease. In order to support these students, it is required for counselor in student guidance office to collaborate closely with other faculties and staffs inside the university and outside.

**Key Words** : 学生相談, 平成 28 年度活動報告, 学生生活支援室

### 1. 緒 言

学生相談には、心理査定や個別の心理療法など、学生とカウンセラーが 1 対 1 で行うものだけでなく、大学内の教職員との連携や、大学外の関係機関との連携といったコミュニティ臨床、フリースペース（以下、FS）の運営、ワークショップの企画・実施といったグループ臨床など多様な専門性が求められている（齊藤, 2016）。また、障害者差別解消法の施行などとも関係し、今後は、発達障害だけでなく、精神障害、身体障害、性同一性障害など様々な障害学生を支援していくことが学生相談には求められている（齊藤, 2016）。そのため、学生相談が行う支援は、一層多様で複雑なものとなってきている。

このような、学生相談活動の多様化と複雑化は、本学の学生生活支援室にも当てはまるといえる。本学の学生生活支援室は、昭和 58 年 5 月に、不適応学生の早期発見・早期支援を目的に学生相談所として発足した（林, 1986）。その後、学内における学生相談所の位置づけは、開設当初の厚生課（昭和 58 年）から学生課（平成元年）、そして学務課（平成 22 年）へと移り、名称も学生相談所（昭和 58 年）、学生生活センター（平成 16 年）、そして学生生活支援室（平成 26 年）へと変わってきた。また、この変化に伴い、学生生活支援室の学内における設置場所の移転、FS の設置、そして臨床心理士の追加などが行われてきた。さらに、近年、様々なニーズを持つ学生に綿密な支援を提供するため、高校 - 大学間の移行支援や、障害学生への修学支援を行うなど、学生生活支援室が担う役割も多様化している。これらのことを踏まえると、本学における学生生活支援室の構造と役割は、およそ 30 年の歴史の中で、大きく変化してきたといえる。さらに、時代とともに、大学の状況は刻々と変化し、学生像も変容していく（齊藤, 2010）ことを考えれば、学生生活支援室が担う役割はいまだ変化の中にあると考えられる。そのため、学生生活支援室の 1 年の活動を振り返り、そこから課題を見つけ、次年度の活動に活かしていくことは、多様なニーズを有する学生を支援していく上で重要である。そこで、本稿では、平成 28 年度の学生生活支援室の活動内容と利用統計を報告し、その成果と課題について検討することを通して、今後の学生相談活動をより

---

\* 原稿受付 2017 年 2 月 28 日

<sup>\*1</sup> 学務課

<sup>\*2</sup> 基盤教育機構

<sup>\*3</sup> 環境情報学部環境・食品科学科

E-mail: gakusei-c@fukui-ut.ac.jp

一層充実させるための知見を得ることを目的とする。

## 2. 活動内容

学生生活支援室では、学生、保護者、教職員の相談への対応に加え、平成 24 年度より学生生活支援室内に FS を設け、学生にとっての居場所作りを行っている。また、これら基本業務に加え、平成 27 年度から、大学生生活上のリスクを抱える学生を早期に支援に繋げることを目的に、健康診断時に、University Personality Inventory（以下、UPI）（平山・全国大学メンタルヘルス研究会，2011）を用いたスクリーニング面接を実施している。さらに、平成 26 年度より、学生生活支援室利用学生の卒業後のフォローと学生生活支援室利用学生の就労意欲の向上を目的に、「学生生活支援室・利用学生と卒業学生の交流会」を企画・実施している。そこで、ここでは、FS 活動、UPI を用いたスクリーニング面接、そして、「学生生活支援室・利用学生と卒業学生の交流会」という 3 つの活動について報告することとする。

### 2.1 FS 活動について

#### 2.1.1 FS の概要

近年、いくつかの大学では、FS の設置など、大学生の居場所づくりが積極的に行われている（斉藤・飯田・川崎，2011）。「居場所」の定義は研究によって様々であるものの、「ありのままでいられる」とこと「役に立っている」と思える」ことの 2 側面から居場所感を捉えた石本（2010）は、居場所感が大学生の心理的適応と関連していることを報告している。このことから、大学生の適応を考えるうえで、「居場所」は重要な概念であるといえる。

本学の学生生活支援室においても、一定のルールのもと、学生が自由に過ごすことができる居場所を提供することを目的に、FS は学生生活支援室（当時の名称は、学生生活センター）の移転に伴い設置された。FS の詳細な利用状況については、3.1.3 で報告するため、ここでは、学生生活支援室における FS の構造と活用の仕方について報告することとする。

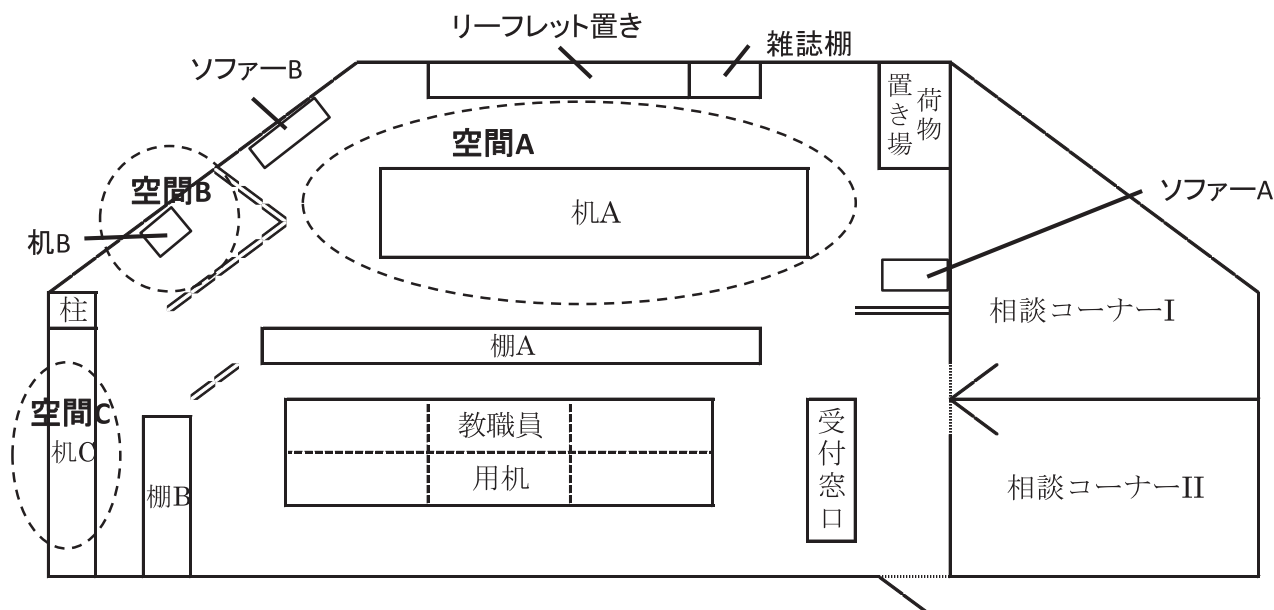


Fig.1 フリースペースの見取り図

注) == パーテーション

Fig. 1 に、FS の構造を示す。本学における FS は、大きく分けると 3 つの空間から構成されている。空間 A は、大きな机を中央に据え、そこに 9 名ほどの学生が座ることができるようになっている。この空間は、多くの学生が利用し、そこでは、学年や学科を超えた学生同士の交流が見られる。空間 B は、パーテーションで区切られており、空間 A で過ごす学生からは、姿が見えにくい設計となっている。ここは、膝ほどの高さの机を挟んで 2 名の学生が座ることができるようになっている。空間 B は、主に、1 人で過ごしたい学生や気持ちを落ち着かせたい学生、少人数で静かに歓談をしたい学生などが利用している。最後に空間 C は、最大 4 人の学生が座ることが

でき、部屋の入口から最も遠く、椅子は窓側を向いているため、他の学生から正面姿が見えにくい設計となっている。この空間は、主に授業の課題などに 1 人で取り組みたい学生が利用することが多い。また、ここは教職員が毎日待機している場所と距離が近く、教職員と雑談したい学生が利用することもある。教職員は、主に教職員用スペースに在中しており、学生が何をしているのかなど見渡すことができるようになっている。

### 2.1.2 学生による FS の利用の様態

次に、学生による FS の活用の仕方について報告する。FS の活用の仕方として、第 1 に「空き時間の居場所」としての活用が挙げられる。大学では、必ずしも連続して講義があるわけではないため、FS を利用する学生の多くは、講義のない合間の時間の居場所として FS を利用している。具体的には、講義のない時間に来室し、読書をして過ごす学生や、授業の課題に取り組む学生などである。

第 2 に「学生同士の交流の場」としての FS の活用が挙げられる。友人数名で来室し、その友人同士で雑談などをして過ごす場合もあれば、FS に来室した学生同士で、学科や学年を超えての交流も見られる。また、FS を利用する学生の中には、他者と関係を築くことが苦手な学生もいる。その時は、斉藤ら（2011）も報告しているように、必要に応じて、学生生活支援室に在中している教職員が中に入り、学生同士が交流するきっかけづくりを担うこともある。しかし、教職員が仲を取り持たなくとも、対人関係が苦手な学生に他の学生が話しかけ、交流のきっかけとなることも見られる。また、このような交流が見られる一方で、学生同士の関わりが行き過ぎてしまい、学生間のトラブルに発展することもある。その際は、必要に応じて、学生生活支援室の教職員が間に入り、学生が問題について内省する機会とした。

第 3 の活用の仕方として、学生生活支援室の「教職員との交流」が挙げられる。学生生活支援室にいる教職員に興味の話や大学生活の大変さを話すなど、教職員と雑談をして過ごす学生も多い。その雑談の中には、雑談という体を取りながら、日常生活での悩みや困りごとが話されることもあり、教職員は、カウンセリングという枠組みではないものの、学生の話聞き、学生の相談に乗っていることも度々ある。また、そのような雑談がきっかけで、その後に継続的なカウンセリングに繋がっていく事例も見られる。

## 2.2 UPI を用いたスクリーニング面接

### 2.2.1 UPI テストとスクリーニング面接の実施

平成 28 年 4 月 11 日から 13 日の午前中、そして 18 日の計 3.5 日間行われる健康診断において、検査項目の 1 つとして UPI テストとスクリーニング面接を実施した。具体的には、健康診断の際の検査項目として、学生が UPI テストにその場で回答し、続いて、学生生活支援室担当教職員（非常勤カウンセラーを含む）が数分間の面接を行った。この時、UPI テストは、マークシート形式を採用した。健康診断の数日間ですべての学生に円滑に面接を行うため、平山・全国大学メンタルヘルス研究会（2011）を参考に、着目するとよい項目を簡潔にまとめた「健康診断・面接マニュアル」を作成した。また、テスト項目に「現在、悩みなどの相談をしたい」という項目を追加し、その項目にチェックをつけている学生や、選択項目数の多い学生、また、面接をして面接者が気になった学生には、学生生活支援室の連絡先を記載した連絡先カードを渡し、学生生活支援室の利用を勧めた。また、面接者が面接を行い、特に心配な学生や、面接の中で、相談の意思を示した学生には、学生生活支援室の利用を勧めるとともに、連絡先を尋ね、後日連絡をする旨を伝えた。

### 2.2.2 UPI テストを用いたスクリーニング面接の結果とその後のフォロー

健康診断が行われた 3.5 日の間に、学生生活支援室担当教職員が 2181 名と面接を行った。その中から、面接者が心配になった学生は 411 名、相談を希望していた学生は 44 名、相談の意思は認められなかったが、健康診断後連絡が必要であると考えられた学生は 2 名であった。これらを合わせた 46 名の学生のうち、すでに学生生活支援室を利用していた 14 名と、健康診断後に自主的に学生生活支援室に相談に来た 2 名を除く、30 名の学生を対象に連絡を取った。その結果、学生生活支援室からの連絡後に来談した学生は 4 名、「今は問題ない」など、連絡の時点で相談の希望がなかった学生が 16 名、来談を希望していたが当日に来談しなかった学生が 2 名、連絡が取れなかった学生が 8 名であった（Table 1）。また、UPI をきっかけに来談した学生のうち、4 名が継続相談を希望した。なお、平成 28 年度の健康診断を受診した学生は 2273 名であり、受診率は約 95%であった。

Table1 平成28年度のUPIを用いたスクリーニング面接の結果

	人数
総相談者	2181名
心配な学生	411名
相談希望者・要連絡学生	46名
支援室利用学生	14名
自主来談	2名
連絡者数	30名
UPI後来談者	4名
相談希望なし	16名
当日来談なし	2名
連絡が取れない学生	8名

### 2.3 学生生活支援室・利用学生と卒業生の交流会

本学では、平成 26 年度より、学生生活支援室を利用している在學生と学生生活支援室を利用していた卒業生を対象に、「利用学生と卒業生の交流会」を開催している。この会の目的は、卒業生の卒業後の様子を知ることや、困っていることはないかななどのフォローアップ、そして、卒業生との交流を通じての在學生の就労意欲の向上である。

この交流会は、W 大学の「発達障害学生のある学生の自助グループ（WADS）（長岡・石川・檜木，2012）が行っている卒業生 OB との懇親会を参考にして始められ、平成 28 年度は第 3 回目の開催となる。平成 27 年度までは、大学祭期間中である 10 月に開催していたが、今年度は大学が夏季休暇に入った 8 月 6 日に開催した。交流会の対象者は、卒業生と大学 3，4 年生とした。交流会へは利用学生 7 名（3 年生 2 名，4 年生 5 名），卒業生 6 名（平成 25 年度卒業生 2 名，平成 27 年度卒業生 4 名）の計 13 名が参加した。また、交流会に参加した教職員は 7 名であった（学生生活支援室担当教職員 5 名，非常勤カウンセラーを含む）。

交流会では、学生生活支援室担当教員の司会のもと、参加者が自己紹介と近況報告を行い、その後、在學生から卒業生への質問の時間とした。在學生からは、就職活動にかかった費用や会社を決めたきっかけなど就職活動に関する質問が出され、卒業生は就職活動中に感じていたことを踏まえて質問に答えていた。この質問の後、在學生と卒業生が自由に歓談できる時間を設けた。また、今年度は、在學生と卒業生の自由な交流を促すため、レクリエーションとしてかき氷作りを取り入れた。この自由時間は、在學生にとっては、就職活動や仕事について卒業生の話聞く機会になっており、また、卒業生にとっては、久しぶりに会う友人や教職員と近況などについて語り合う時間となっていた。卒業生の話からは、卒業生それぞれが社会に出て苦労しながらも、自分の力で、時に周りを頼りながら、困難を乗り越えていっている姿が感じられた。

交流会後に実施したアンケート結果から、在學生と卒業生ともに、「楽しかった」「次回も参加したい」など交流会の開催について好意的な意見が多かった。また、在學生にとって、卒業生との交流を通じて、自身の進路について考えるきっかけになっていることが分かった。

## 3. 利用者統計

次に、平成 28 年度の学生生活支援室利用者統計に関して、過去 12 年間の利用者数の推移、個別相談者、FS 利用者についてそれぞれ報告する。

### 3.1 利用者統計結果

### 3.1.1 利用者統計結果

過去 12 年間の学生生活支援室の利用者数（延べ人数）を、Fig.2 に示す。平成 24 年度から FS を設けるなど、学生生活支援室の構造自体が変化していることや、過去 12 年間を通して、学生生活支援室の人員構成が変化している（荒木ら、2016）ことなどを加味すると、単純に年度間の来談者数を比較することは難しい。しかし、Fig.2 から、この 12 年間でカウンセラー相談件数とその他利用者数はともに増えており、学生生活支援室の来談者数は増加傾向にあることが分かる。

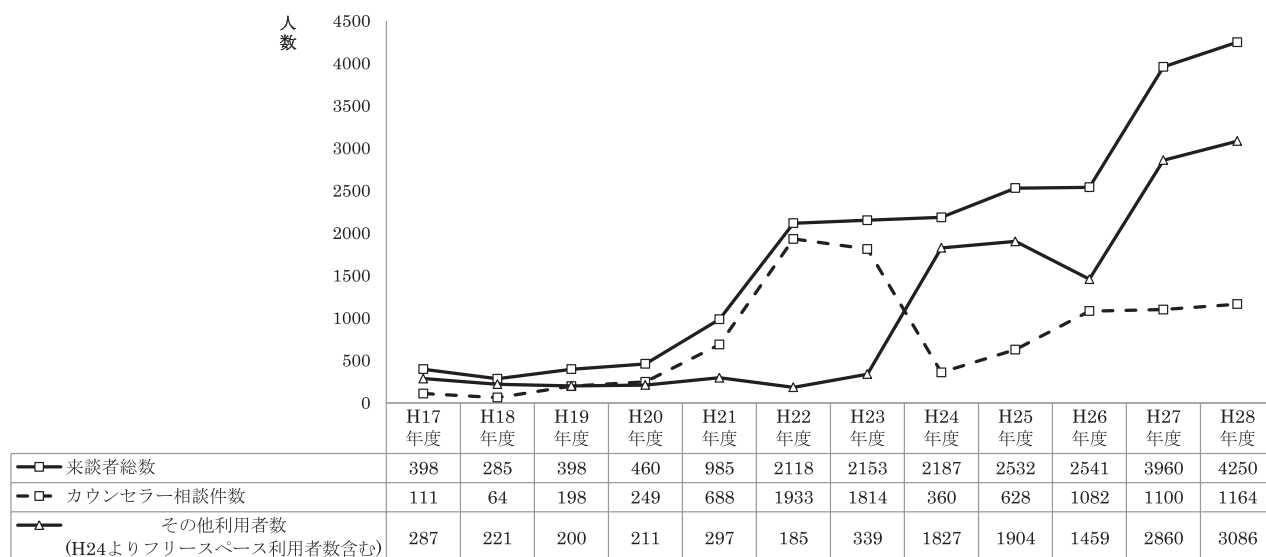


Fig.2 過去12年間の利用者数

次に、Fig.3 に月ごとの相談件数、FS 利用者件数、その他件数を示す。相談件数は、学生本人へのカウンセリングや、保護者や教職員からの相談、個々の学生への個別の対応、教職員へのコンサルテーションなど、学生生活支援室担当教職員が、個別相談に応じた延べ件数である。次に、FS 利用者件数は、学生生活支援室内にある FS で、課題に取り組む、昼食を食べる、雑談をするなど、学生が FS を利用した延べ件数を示している。最後に、その他件数は、学生への窓口対応や、学生や保護者からの面談の予約、教職員と学生生活支援室スタッフ間の情報共有、外部機関との連携、家庭訪問など、相談以外の延べ対応件数である。

長期休暇期間は FS を閉室していたことや、10 月より学生生活支援室スタッフが 1 人減少していることを考慮する必要はあるが、1 年を通して、相談件数は 100 件前後を、FS 利用者件数は 300 件前後を推移していた。特に 1 年の間で、相談件数は 6 月と 10 月が多く、FS 利用者数は、6、7 月と 10、11 月が多かった。

### 3.1.2 個別相談者統計

Fig.4 に、Fig.3 の相談件数における相談内容別内訳を示した。分類項目は日本学生支援機構実施の調査項目に準拠している。その結果、修学上の問題が 33.4%と最も高く、続いて、進路・就職に関する相談が 20.1%、対人関係に関する相談が 17.1%であった。統計上、相談内容の最も顕著なものを記録しているため、この統計には反映されていないが、実際は、複数の要因が絡み合い問題が生じていることもある。例えば、修学上の問題の背景に、発達障害や心理的問題が認められる場合も多い。また、この結果から、発達障害（5.6%）や、精神障害（3.1%）の相談は、昨年度（発達障害 6.8%、精神障害 11.6%）（荒木ら、2016）より低いものの、病院など専門的な機関と連携し支援していく必要性は依然として大きいといえる。



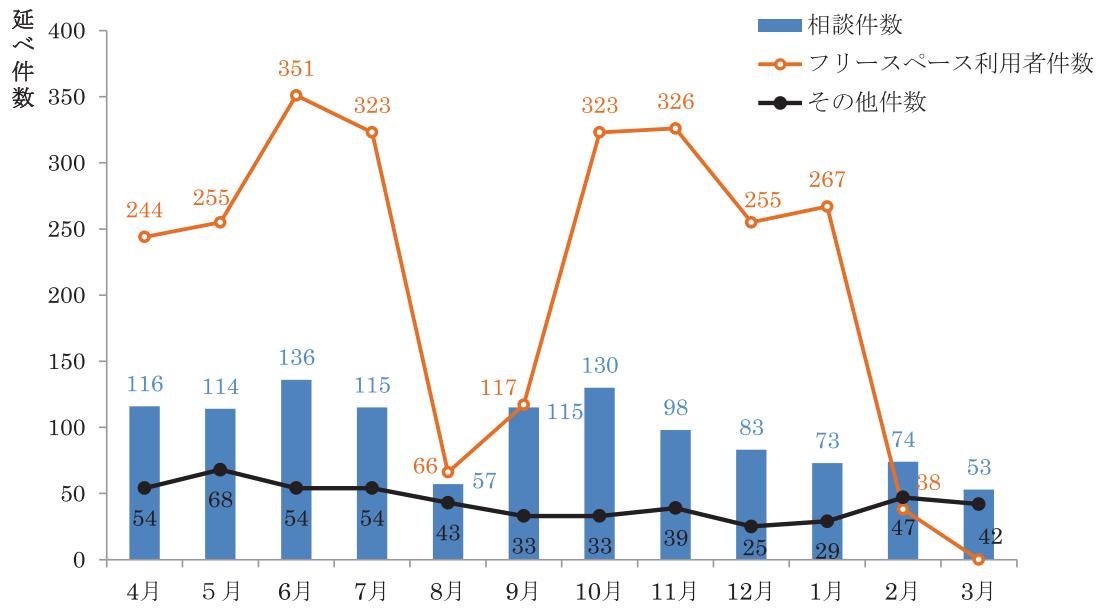


Fig.3 月別・学生生活支援室利用者内訳(延べ件数)

注) 長期休暇のため、フリースペースは 8 月 8 日から 9 月 14 日、2 月 6 日から 3 月 31 日の期間は閉室とした。

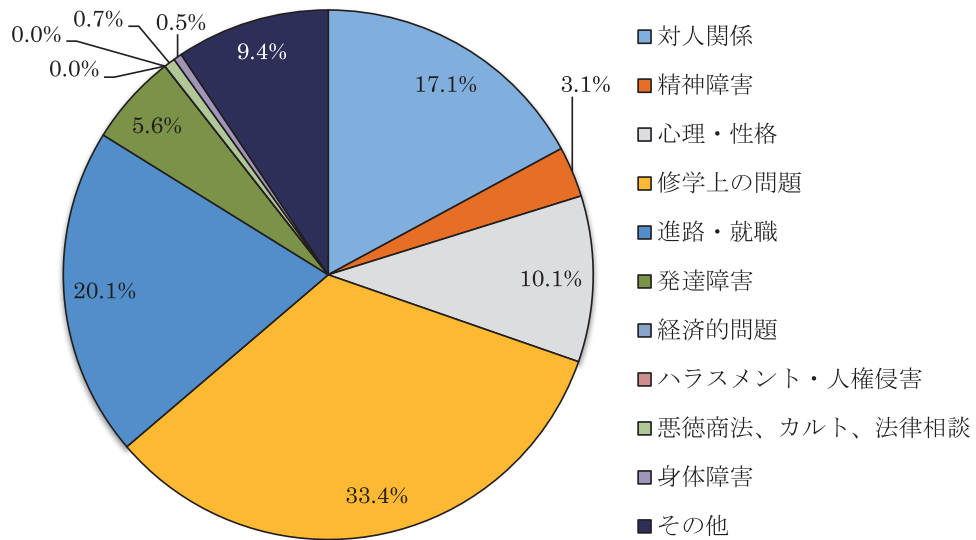


Fig.4 相談内容 (JASSO調査項目) の分類結果

Table2 相談内容分類の学年別結果(JASSO調査項目)

相談内容(項目)	学年					計
	1年	2年	3年	4年	院	
1.対人関係	78	11	57	39	14	199
2.精神障害	0	0	1	6	29	36
3.心理・性格	16	36	21	36	9	118
4.修学上の問題	44	48	29	226	42	389
5.進路・就職	13	1	9	150	61	234
6.発達障害	17	0	21	27	0	65
7.経済的問題	0	0	0	0	0	0
8.ハラスメント・人権侵害	0	0	0	0	0	0
9.悪徳商法、カルト、法律相談	5	2	0	1	0	8
10.身体障害	1	0	1	3	1	6
11.その他	14	13	22	55	5	109
計	188	111	161	543	161	1164

相談内容の学年別結果を Table 2 に示す。1 年生では対人関係（78 件）と修学上の問題（44 件）が、2 年生では修学上の問題（48 件）と心理・性格（36 件）が、3 年生では対人関係（57 件）と修学上の問題（29 件）が、4 年生は修学上の問題（226 件）と進路・就職（150 件）と特に多かった。学年によって違いはあるものの、修学上の問題はどの学年においても頻繁にみられる悩みであるといえる。

続いて、月別・学年別の相談者件数を Table3 に、月別・学科別の相談者件数を Table4 に示す。これらの結果からは、学年や学科によって相談件数に違いはあるものの、どの学年、どの学科の学生も、学生生活支援室を利用していることが分かる。

Table 3 月別・個別相談者件数(学年別)内訳

	学年					計
	1年	2年	3年	4年	院	
4月	17	9	18	58	14	116
5月	16	9	9	59	21	114
6月	30	17	14	62	13	136
7月	24	15	8	57	11	115
8月	11	3	8	27	8	57
9月	12	17	16	51	19	115
10月	20	7	23	64	16	130
11月	17	8	18	42	13	98
12月	10	10	13	34	16	83
1月	14	4	17	27	11	73
2月	10	5	11	35	13	74
3月	7	7	6	27	6	53
計	188	111	161	543	161	1164

Table 4 月別・個別相談者件数(学科別) 内訳

	学科									計
	A	S/B	D	E	K	M	N	F/P	院	
4月	14	11	27	24	17	1	0	8	14	116
5月	10	10	22	17	18	5	0	11	21	114
6月	15	19	21	29	18	4	1	16	13	136
7月	12	16	13	15	19	6	0	23	11	115
8月	10	6	7	8	8	2	1	7	8	57
9月	13	15	15	18	16	7	0	12	19	115
10月	8	13	19	23	18	11	1	21	16	130
11月	2	9	14	16	20	6	1	17	13	98
12月	3	7	10	17	15	6	0	9	16	83
1月	5	2	10	12	12	4	3	14	11	73
2月	8	6	9	9	17	2	0	10	13	74
3月	3	3	12	10	15	0	0	4	6	53
計	103	117	179	198	193	54	7	152	161	1164

最後に、Table 5 に学科・学年別に個別相談のために来談した学生の実数を示す。平成 28 年度に学生生活支援室を利用した学生 156 名のうち、相談のために来談した学生は 90 名であった。このうち、休学した学生は 11 名、退学した学生は 7 名、修業年限 4 年以上の学生は 7 名、平成 28 年度末に卒業延期となった学生は 11 名であった。Table 5 の結果から、電気電子工学科とデザイン学科の学生の利用数が最も多く、反対に、原子力技術応用工学科の学生の利用数は最も少なかった。学年別では、4 年生の利用が最も多く、次いで、3 年生、1 年生、2 年生となっていた。

Table 5 学科・学年別個別相談者(実数)

学科	学年				院	計
	1年	2年	3年	4年		
A	3	1	3	5	0	12
S/B	0	1	2	2	0	5
D	5	3	5	8	0	21
E	4	2	5	7	2	20
K	2	4	1	6	0	13
M	0	2	2	0	2	6
N	0	0	2	0	0	2
F/P	5	1	1	2	2	11
計	19	14	21	30	6	90

### 3.1.3 FS 利用学生統計

FS 利用学生の延べ利用件数について、月別・学年別の FS 利用件数を Table 6 に、月別学科別 FS 利用件数を Table 7 に示す。この結果から、FS の利用は、学科別に見ると、電気電子工学科の学生の利用件数が高く、学年別に見ると、1 年生の利用件数が高かった。

次に、FS 利用学生(実数)を Table 8 に示す。FS 利用件数と同様、FS を利用した学生は、1 年生が最も多く、次いで 2 年生が多かった。学科別に見ると、電気電子工学科、経営情報学科の順で利用する学生数が多かった。以上の結果を合わせて考えると、様々な学年、学科の学生が FS を利用していること、同一の学生が繰り返し FS を利用していることが分かる。



Table 6 月別・フリースペース利用件数（学年別）内訳

	学年				院	計
	1年	2年	3年	4年		
4月	63	57	87	31	6	244
5月	97	48	89	21	0	255
6月	152	54	102	42	1	351
7月	144	39	84	56	0	323
8月	28	9	15	14	0	66
9月	50	18	38	11	0	117
10月	138	45	107	33	0	323
11月	156	34	110	26	0	326
12月	131	24	71	29	0	255
1月	130	27	90	20	0	267
2月	19	4	10	5	0	38
計	1108	359	803	288	7	2565

Table 7 月別・フリースペース利用件数（学科別）内訳

	学科								院	計
	A	S/B	D	E	K	M	N	F/P		
4月	15	42	16	52	49	38	25	1	6	244
5月	24	40	19	82	51	28	9	2	0	255
6月	35	42	24	146	49	40	8	6	1	351
7月	30	47	21	138	47	21	4	15	0	323
8月	3	12	4	30	14	1	0	2	0	66
9月	6	15	8	49	20	7	8	4	0	117
10月	14	48	19	137	56	22	15	12	0	323
11月	15	39	17	152	45	19	18	21	0	326
12月	15	29	15	127	37	9	10	13	0	255
1月	12	32	13	122	35	16	13	24	0	267
2月	2	3	3	18	6	1	1	4	0	38
計	171	349	159	1053	409	202	111	104	7	2565

Table 8 フリースペース利用者数（実数）

学科	学年				院	計
	1年	2年	3年	4年		
A	1	0	1	1	0	3
S/B	0	0	2	2	0	4
D	0	0	1	1	0	2
E	17	1	1	2	0	21
K	1	8	1	2	0	12
M	0	6	3	0	1	10
N	2	0	1	0	0	3
F/P	1	0	2	2	0	5
計	22	15	12	10	1	60

## 4. 考 察

本稿では、平成 28 年度における学生生活支援室の活動について、FS、UPI を用いたスクリーニング面接、利用学生と卒業生の交流会、そして、利用者統計について報告した。ここでは、以上の報告に基づき、学生生活支援室の活動の成果と課題について考察することとする。

### 4.1 FS について

今年度は、FS を約 60 名の学生が利用し、FS を利用した学生の延べ件数は、2565 件であり、昨年度よりも利用者数、利用者件数ともに増加傾向にあることが窺われる（荒木ら、2016）。FS で過ごす学生の様子からは、FS が学生にとって、休憩時間に自由に過ごすことができる場所、他の学生との交流の場、そして、教職員など大人との交流の場として機能していると考えられる。本学には、学生ロビーなど学生が自由に過ごすことができる場所は他にもあるが、それらの空間と違う点を挙げるとすれば、FS は学生が大人に見守られながら過ごすことができる場所であるということである。他者との関わりに不安を抱いている学生にとって、大人がいることは安心感に繋がり、その安心感があるからこそ、その中でより自分らしくいられると考えられる。また、対人関係を築くことが苦手な学生にとって、教職員が適宜間に入ることで、実際の対人関係を通して、新しい社会的スキルを身に着ける場所にもなると考えられる。さらに、1 年生の FS の利用者数は、昨年度は 21 名（荒木ら、2016）、今年度は 22 名であり、他の学年と比較して最も多かった。大学に入学したばかりの 1 年生にとって、大学生生活は不安なことも多く、FS のように自分のペースで過ごすことができ、また、傍に教職員がいるような空間は、大学生生活に適応していくための安全基地のように働くのかもしれない。また、以上のように FS が多様な機能を持ち得るのは、Fig.1 で示したように、FS が、学生に性質の異なる様々な空間を提供できていることに依るところも大きいと考えられる。

今年度の振り返りを通して、FS 活動の今後の課題として以下の 3 点が挙げられる。

第 1 に学生数の増加に伴い、多様な学生が利用するようになったことで、今後、一部の学生集団の FS での振る舞いが、他の利用学生の妨げになる可能性も考えられる。FS には、開放的で自由な雰囲気や居心地のよさ、そして使いやすさなどが求められることに加えて、適度な管理体制も必要とされる（金子・鈴木、2010）。そのため、学生生活支援室における FS の運営に関しても、各教職員が FS の管理者として、ルールを適宜学生に伝えていくことが必要になるだろう。

第 2 の課題として、荒木ら（2016）も指摘しているように、FS を含む学生生活支援室の構造が挙げられる。Fig.1 から分かるように、学生生活支援室において、FS と相談室（相談コーナーⅠ、相談コーナーⅡ）は隣接しており、FS での学生同士の会話は、相談室にも届き、相談に来ている学生との面談の妨げになることもあり得る。また、相談に来た学生の中には、カウンセリングを受けていることを他の学生に知られたくないものもいると考えられるが、現状の構造では、来談した学生の匿名性を守ることが困難な場合も多い。そのため、今後は、第 1 の課題とも関係して、教職員が一定のルールのもと FS の管理運営を行っていくこと、そして、学生生活支援室の物理的環境を整備していくことが課題であるといえる。

第 3 の課題として、FS 活動の評価が挙げられる。FS 活動を振り返り、より充実したものにしていくためには、学生にとって FS がどのように機能し、どのような場所になっているかなど、より客観的な資料に基づいて検討していくことも必要だろう。

### 4.2 UPI テストを用いたスクリーニング面接

UPI テストを用いたスクリーニング面接は、昨年度に引き続き、今年で 2 度目の実施になる。今年度は、30 名の学生に連絡を取り、来談した学生は 6 名であった。そのうち、継続的な来談に繋がった学生は 4 名であった。スクリーニング面接を行わなかった場合、学生生活支援室に繋がらなかった可能性があることを考えると、このスクリーニング面接の意義は大きかったといえるだろう。

以上に加え、学生の相談を促す上で、情報提供活動は重要であり（高野・宇留田、2002）、健康診断時に全学生を対象に面接を行うことは、カウンセラーの存在や、具体的な支援内容など、学生生活支援室に関する情報を学生に伝える機会にもなると考えられる。すなわち、このような取り組みは、スクリーニングという機能に加えて、

学生への情報発信という機能も有しており、学生の来談に伴う心理的コストを減らすことに繋がるだろう。そのため、この時点では学生生活支援室を利用しなかったとしても、今後学生が問題に直面した時に、学生生活支援室の存在を思い出し、利用する可能性を高めると考えられる。

また、平成 27 年度は 21 名（荒木ら, 2016）の学生が利用していたことを考えると、今年度は、健康診断時の面接をきっかけに来談した学生数は減少していた。その理由として、今年度は、4 月中に対象学生すべてに連絡を取れなかったため、電話連絡時に学生の悩みが解決しており、来談に繋がらなかった可能性が考えられる。このことを踏まえ、次年度は、健康診断後、早急に学生に連絡を取ることを試み、早期の来談に繋がるように努めることが課題である。以上に加えて、今年度は、連絡が取れなかった学生が 8 名いた。これらの学生には、電話連絡だけでなく、メールや学科を通して連絡を取るように試みたものの、連絡を取ることはできなかった。そのため、次年度は、今年度よりも一層、各学科の教員と連絡を取り、連絡を取れず来談しなかった学生については、その学科の学生生活支援室教員カウンセラーに様子を確認してもらうなど、何らかの形でリスクのある学生と繋がっていくように努める必要がある。

#### 4.3 利用学生と卒業生の交流会

今年度の利用学生と卒業生の交流会は、卒業生 6 名、利用学生 7 名の合計 13 名の学生が参加した。卒業生から在学学生へのメッセージには、卒業生自身が就職活動や社会に出て感じたことについて書かれていた。長岡ら（2012）は、卒業生が会に参加することは、卒業生にとって自分の経験が誰かの役に立つことを実感できる機会にもなる、と述べているが、これらのメッセージや、卒業生が在学学生に就職活動などについて助言をしている姿からは、学生生活支援室におけるこの交流会も、卒業生にとって同様の体験に繋がっていると考えられる。さらに、参加した卒業生の多くが、この交流会に好意的な感想を述べており、卒業生にとって、この交流会は、学生生活支援室との繋がりを感じる機会となっていることも窺われる。また、交流会では、在学学生は卒業生に就職活動について、様々な質問をしていた。在学学生にとって、実際に社会に出て働いている卒業生の話を聞くことは、改めて自分の将来について考える機会となると考えられる。

以上に加えて、学生生活支援室の教職員にとっても、この交流会は、卒業生のフォローアップという点で重要である。この交流会を通して卒業生の様子を知ること、卒業生が問題を抱えている時に、適切な支援機関を紹介することも可能であると考えられる。学生生活支援室にとって、学生が卒業した後の支援は非常に困難であり、地域の支援機関に頼るほかない。しかし、卒業した学生が、必ずしも、そのような支援機関と繋がれるわけではなく、社会に出て困難に直面した際に、1 人で問題を抱えてしまう可能性もあるだろう。学生生活支援室は、在学中のように困難を抱えた卒業生を定期的に支援していくことは難しいものの、この交流会を通して、卒業生の状況を知り、必要な際は、適切な支援機関に紹介するなど地域の支援機関と協力することで、間接的に卒業生を支援していくことができるだろう。

#### 4.4 学生生活支援室全体の活動を通しての成果と課題

昨年度（荒木ら, 2016）と同様、今年度も、対人関係や心理・性格についての相談から発達障害や、精神障害など、専門的支援を必要とする内容の相談まで、学生の抱える悩みは様々であった。このような学生の相談に対応するため、今年度も、学内の教職員や学外の支援機関との連携を重視してきた。例えば、修学上の問題には、単位の取得に関するものや、休学や退学に関するものなどが含まれており、学生生活支援室だけで対応することが難しい場合も多く、必要に応じて担当教員と情報や方針を共有しながら支援を行った。また、履歴書の書き方や就職活動に関わる相談も多く、その際はより専門的な支援者である就職支援課の職員と連携し、学生を支援した。さらに、昨年度（荒木, 2016）よりも占める割合は少ないものの、今年度も精神障害や発達障害を理由に来談する学生が見られた。このような学生に対応していくために、必要に応じて病院と連携し、学生生活の支援と医学的支援の両方から学生を支援していくように努めてきた。

今後は、発達障害学生の就労支援や、身体障害、精神障害、性同一性障害など様々なニーズを持つ障害学生を支援していくことが学生相談には求められる（齊藤, 2016）ことを考えると、大学内の他の専門性を有する教職員や大学外の支援機関と連携を密に取っていくことが重要である。さらに、1 人の学生の支援には、担当教員や学務課職員、就職支援課職員など、何人もの教職員が関わることも多い。そのため、関係者が 1 つのチームとして、

方針を共有し、それぞれの専門性を活かした支援をしていくために、ケース会議を積極的に行っていくことも必要である。

## 付 録

本報告は、学生相談年報 31 号（平成 28 年度版）の活動報告としてまとめたものである。

## 文 献

- 荒木史代・笠井利浩・菅田優子・伊藤真紀・小柳喜代美・前川翔太 (2016). 平成 27 年度学生生活支援室活動報告 福井工業大学紀要, 46, 304-311.
- 林 正己 (1986). 学生との触れ合い～学生相談所の発足まで～ 福井工業大学学生相談年報, 1, 2-3.
- 平山 皓・全国大学メンタルヘルス研究会 (2011). 大学生のメンタルヘルス管理 UPI 利用の手引き 創造出版
- 石本雄真 (2010). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21, 278-286.
- 長岡恵理・石川悦子・檜木啓二 (2012). 大学の学生相談室における発達障害学生への支援の取り組み LD 研究, 21, 361-369.
- 齋藤憲司 (2010). 学生相談の理念と歴史 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会(編)学生相談ハンドブック (pp. 10-29) 学苑社
- 斉藤美香・飯田昭人・川崎直樹 (2011). 北翔大学北方圏学術情報センター年報, 3, 143-149.
- 齋藤暢一郎 (2016). 2015 年度における学生相談界の動向 学生相談研究, 37, 49-59.
- 金子玲子・鈴木佳子 (2010). 来談学生に応じた対応の工夫 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会(編)学生相談ハンドブック (pp.108-126) 学苑社
- 高野 明・宇留田 麗 (2002). 援助要請行動から見たサービスとしての学生相談 教育心理学研究, 50, 113-125.

(平成 29 年 3 月 31 日受理)